２．２　教育の歴史とその背景

２．２．１　総論

近世日本には様々な種類の学校が林立した。幕府が運営する**官立（官営）学校**，藩が運営する**藩校**，領主や領民が組織で運営する**郷校（郷学）**，武士から領民まで身分を問わず個人で運営する**私塾**や手習塾（寺子屋）である。学ぶ内容も読み書きそろばんから高度な学問まで多岐にわたるが，身分に関係なく多くの人々が学校で学ぶ機会を得た。

このような学校はいずれも近世日本で発展したものであるが，古代から中世にかけて日本社会に学びの土壌が育まれていたからこそ可能であった。

(1) 古代（７世紀～12 世紀中頃）

日本における教育制度は，７世紀に大陸から導入した古代律令制のもとで，中央に大学寮，地方の各国に国学といった官吏養成機関が設けられたことに始まる。中央の大学には，儒教を講ずる明経道・算道の２科が置かれるほか（後に明法・文章道の２科も追加された。），地方の国学では，明経道や医学が講じられるなど，教育制度も整えられた。

中国大陸や朝鮮半島より招来された経書等のテキストは漢籍であったが，日本では，その漢文を日本語の文法に従って読むという独自の翻訳法である訓読が行われるようになり，９世紀になると，漢字を変形させた仮名文字の発明により，漢字と仮名の両方で表現することが可能になった。

中国の学制との大きな違いは，唐では学制の身分階層や学問分野によって学校が分かれていたのに対し，日本では大学寮や国学のみに限られていた点にある。しかも大陸においては科挙が人材を諸階層から求めるうえで大きな役割を果たしたのに対して，日本では律令導入以前の族制社会が温存されたことで，貴族は官僚社会での地位を継続的に保持することができ，必ずしも大学に入学し，任官試験を受ける必要はなかった。したがって，日本では科挙制度は根付かずに，大学や国学は律令国家の衰退とともに次第に機能しなくなっていった。また，唐に比べて儒教を偏重せず，教養として漢文を取り入れた。このため，他の漢字文化圏である中国・朝鮮・ベトナムとは異なる学習環境や学校が発展するようになった。

(2) 中世（12 世紀後半～15 世紀）

古代末期には，大学や国学は機能しなくなり，代わりに貴族・武士の家や寺院での教育が中心となっていった。

中世には，教育テキストとして往復書簡形式で知識と礼節を伝える「往来物」が誕生した。このうち 14 世紀に編纂された「庭訓往来」は近代に至るまで５世紀にわたって教育テキストとして使用され，日本の教育の発達に強い影響を与えた。

書籍の幅広い普及に伴い，一括して保管するための施設が求められた。13 世紀後半に鎌倉幕府の重臣北条実時が金沢文庫を創設した。金沢文庫は北条氏滅亡後に衰退したが，文庫は北条氏の菩提寺である称名寺によって管理され，15 世紀には室町幕府の関東管領上杉憲実が再興した。現在でも２万点を超える典籍が残されている。また，同じく上杉憲実が多くの漢籍を足利学校に寄贈して整備を行った。

あわせて，大陸の新しい学問や知識が多くの禅僧からもたらされた。禅院は京都の南

禅寺を別格として，京都五山・鎌倉五山の制が設けられ，学問や知識を全国に発信する役割を担った。禅僧は禅学とともに新儒学（朱子学）に深く通じ，支配者層の教養の師匠となった。新儒学は関東の足利学校など，地方にも普及していった。

(3) 中世から近世への移行期（16 世紀）

15 世紀後半になると，日本は戦国時代とよばれる，約 1 世紀にわたる戦乱の時代になる。知識人は戦乱の京都を離れて地方の大名・武将らのもとに身を寄せる傾向が強まり，新儒学など多くの学問・知識が中央から地方へと普及していった。その結果薩摩・肥後を中心とする薩南学派や，土佐を中心とする海南学派が誕生した。

戦国時代において教育の普及を担ったのは，アジール的存在の寺院や足利学校であった。寺院では仏教の教学とともに儒学が講じられたが，足利学校では，全国各地から僧侶をはじめ多くの人々が集まり，儒学を基本としながら，学徒の要望もあり，易学や兵学・医学など幅広い学問が学ばれるようになった。出身者は全国に散らばって，学問・文化の普及に貢献した。16 世紀半ばに日本を訪れた宣教師フランシスコ・ザビエルは，足利学校を「日本国中最も大にして，最も有名な大学」と西欧に紹介している。

こうした教育の発展は，来るべき近世社会の教育資産の発展の前提となった。

(4) 近世（16 世紀末～19 世紀）

ア 「平和社会」の招来とリテラシーの向上

戦国の世を克服し，近世日本では「平和社会」が招来された。人々は当時の世を「泰平の御世（みよ）」と呼んだ。

当初，幕府は武力を背景にした強権的な政治を行なった（武断政治）。しかし，大名家取り潰しによる浪人の増加などが社会問題となった。さらに，武士は戦うことよりも，行政能力が求められるようになった。そのため，新たな政治手法が求められるようになり，仁政思想の浸透が不可欠となった（文治政治）。

また，16 世紀末に兵農分離（城下に集住する武士と村落の農民の生活を物理的に分離する日本独自の統治システム）が導入されたことで，近世では支配者は村単位に行政を執り行わせる村請制を導入した。そのため，領民に高い自治能力が求められるとともに，村と城下間の意思疎通は文書によって行われたことから，多くの知識とリテラシー（文書作成・読解能力）が必要となった。こうして，領民に文字の普及を促すとともに，人々の学びへの欲求が高まった。村落には手習塾（寺子屋）が設けられて読み書きとそろばんが学ばれ，全国的に識字力の高まりをみた。

村だけでなく，三都（江戸・大坂・京都）をはじめ各地の城下町にも自治能力が求められた。町には人，物，貨幣，そして文化と情報が行き交い，一大消費都市を形成した。彼らの活動のベースになったのは識字や計算能力であったことから，やはりリテラシーが求められた。そのため，三都や城下町に数多くの手習塾（寺子屋）が生まれた。

公文書において幕府は「御家流（おいえりゅう）」という書流を取り入れたことで，全国一様の意思疎通が可能となった。このような文字社会の発展は，支配者層の主導という一面もあ

るが，社会全体に読み書き修得の気運が高まり，人々の学習意欲の向上によるところが大きい。

イ　書籍の普及

学習意欲の高まりとともに，人々は多くの書籍を求めた。簡単に入手できない書籍などは写本をして手元に残すようになった。さらに，1630 年代，一般大衆読者を対象とした書肆（出版商）が京都に出現し，やがて大坂，江戸にも書肆が興り，18 世紀には出版活動が大いに盛況をみた。草子，俳諧書，芸事の台本やテキスト等の教材，謡曲本等が出版され，諸芸能を嗜む人口を増加させる役割を果たした。さらに，古典文学，往来物，重宝記，漢籍の和刻本，経書註釈書等は学校のテキストとなり，地域や身分を超えた教育の普及に大きく寄与した。

幕府や藩でも，私塾や藩校のテキスト需要に応えるため，独自に印刷局を設け，テキストや啓蒙書を出版した（官版，藩版）。8 代将軍徳川吉宗が展開した享保改革（1716～45 年）では，武士のみならず庶民をも含めたすべての階層を対象に学問の振興・普及を図った。享保 7（1722）年，幕府は道徳普及を目的とした『六諭衍義大意』を官刻し，諸国に頒布した。『六諭衍義大意』は庶民用のテキストとして，各地の手習塾（寺子屋）で使用された。

ウ　個人の資質による身分向上

日本の近世国家は，中国・朝鮮・ベトナム等漢字文化圏の国々が採用した科挙制による人材登用システムを採用せず，身分制を維持した。しかし，家格の低い武士が幕府や藩で要職を務め，百姓・町人が士分へ取り立てられるなど，個人の資質が家を繁盛させて家格を上昇させることにつながった事例も少なからず存在した。

こうした風潮の中から，政界で活躍する学者・知識人や，巨大な富を蓄積する分限者，そして優れた芸術を生み出す文化人が輩出された。その結果，支配者層もその力に頼るほどの民間社会が形成され，元禄文化や化政文化といった新しい文化の担い手となった。

そのベースにあるのは教育であり，身分に関係なく教育の大切さが説かれることとなった。

エ　様々な学派の誕生と広がり

幕府は諸外国との交易を制限したが，大陸・半島から様々な情報や知識が長崎や対馬，そして琉球を通して日本へ伝わった。特に近世初期には，文禄・慶長の役で捕虜となった朝鮮人儒学者や，明が滅んだ際に来日した朱舜水等の亡命知識人との交流を通して，日本の儒学理解が飛躍的に向上した。

藤原惺窩は朝鮮人儒学者から積極的に儒学を学び，惺窩の門人林羅山は，慶長 12（1607）年より儒者として徳川家康に登用された。朱子学を講ずる中で，朱子学に対する幕府関係者の認識が深まっていった。尾張藩初代藩主徳川義直は林家に聖堂を寄進し，聖堂は元禄４（1691）年に湯島に移されて，湯島聖堂と呼ばれた。のちに湯島

聖堂は幕府直轄となり，林家第３代林鳳岡が５代将軍徳川綱吉から大学頭を任命されて，代々大学頭を世襲した。

近世の儒学では朱子学派のほか，陽明学派や徂徠学派，折衷学派等様々な学派が誕生したが，寛政２（1790）年に老中松平定信が朱子学派を正学と定めた（「寛政異学の禁」）。そのため，諸藩も朱子学を藩校などで積極的に導入し，庶民も朱子学を学ぶ風潮が強まった。

一方，儒学以外の学問も誕生し，広まっていった。８代将軍徳川吉宗は西洋の書籍輸入の規制を緩和し，キリスト教に関係しない書籍であれば漢訳した書物を輸入する事を認めたことで西洋学問への関心が高まり，洋学と呼ばれる学問が誕生することとなった。

また，近世中期ごろから儒学や仏教が取り入れられる前の日本古典や歴史を学ぼうとする国学が誕生した。このように様々な学問が隆盛し，人々は多種多様の学問を学んだ。

ア～エにより，人々は幅広い教養を求め，読み書きそろばんから高度な学問まで学ぶことができる様々な教育資産が創設された。こうした動きは，他の漢字文化圏の国々と比べて我が国特有のものである。

(5)　近世日本の教育資産の類型

多くの人々が学びの場を求めるようになると，それに呼応して官民双方で教育資産を創設する機運が高まっていった。こうして誕生した教育資産は規模も教える内容も異なるものの，その性格から「ア　官立（官営）学校」，「イ　藩校」，「ウ　郷校（郷学）」，「エ　私塾・手習塾（寺子屋）」，「オ　その他（近世の学校を支えた資産）」に分類することができる。

このような様々な教育資産が創設されることで，身分に関係なく，多くの人々が学ぶ機会を得ることができるようになっていった。特に，近世中期にはこれら教育資産の数は飛躍的に上昇し，多くの人材を輩出していった。

ア　官立（官営）学校

藤原惺窩の門人だった林羅山は，慶長12(1607)年より儒者として徳川家康に登用された。林羅山は家塾を設け，元禄４（1691）年，第３代鳳岡の時に聖堂とともに湯島に移されて，昌平黌（昌平坂学問所）と呼ばれた。

写真２-52　昌平坂学問所

足利学校は，近世では幕府が学校領を寄進し，大成殿や三門の造営を行い，実質的に官立（官営）学校として存続した。足利学校では講義も行われたが，中世から伝来する貴重な漢籍を求めて，全国から多くの知識人が集まり，レファレンス機能をもつ文庫としての役割を有した。

老中松平定信は寛政２(1790)年に通達を発布し，「寛政異学の禁」とよばれる，幕府による教化政策を断行した。異学の禁は朱子学以外の教学・思想を統制する一方，文武を奨励し，能吏を養成した。その一環として寛政９(1797)年，幕府は林家の家塾と聖堂を収公した昌平坂学問所を設立し，直参のみならず，藩士・郷士・浪人の聴講・入門を許可するとともに，公開講釈により庶民教化を活発化するなど，幕府直轄の最高学府としての役割を果たした。

幕府が朱子学を正学としたこともあり，国学を研究した和学講談所（のち和学所。寛政５（1793）年創設）を除き，徽典館(甲府)や明倫堂(長崎)，修教館(佐渡)，修道館(日光)といったその他官立(官営）学校の多くで朱子学を基調とした学問を学んだ。

特に昌平坂学問所や足利学校の規模は群を抜いており，大成殿(孔子堂)が置かれ，杏檀門や，入徳門といった諸門が配置された。また，多くの門下生が学ぶことができるように，大型の講堂（広間型講堂）が建てられた。

ほかには，明和２(1765)年，幕府奥医師の多紀元孝（安元）が開設した私塾・躋寿館を基盤として，寛政３(1791)年に幕府直轄の学校となって医学館が誕生した。医学館では漢方医学を学ぶことができ，朱子学ではないが，漢学を基盤とした学びが行われた。

近世後期になると，洋学を積極的に吸収するために洋書の翻訳などを行う機関蛮書和解御用が設けられた。さらに，幕末になって欧米列強への対抗から，医学所（医学館とは別）や蕃書調所（もと蛮書和解御用。のち洋書調書→開成所と改称）といった西洋を研究する機関のほか，講武所や軍艦操練所といった西洋流の武芸や技術を学ぶ施設が誕生していった。これら施設で勤めた者の中には，昌平坂学問所出身者も多かった。彼らは朱子学を基盤としながら洋学の知識を取り入れるという，多様な学問を吸収することで，幕末の問題に取り組んだのである。

イ　藩校

諸藩でも学問を学ぶ学校を設ける動きが始まった。岡山藩では，寛文９(1669)年に初代藩主池田光政が岡山藩学校を創設した。

水戸藩では，第２代藩主徳川光圀が，明から亡命してきた学者朱舜水を招き，自らや家臣を弟子として，学問を学んだ。さらに，光圀は歴史書『大日本史』編纂所として江戸と水戸に彰考館を創設し（江戸彰考館：寛文 12(1672)年，水戸彰考館：元禄11(1698)年)，諸国から学者を招聘して，修史作業にあたらせるとともに，藩士のための学問所としても機能した。

会津藩では，学僧岡田如黙が城下に建てた私塾（学問塾）を藩の学問所として取り立てて稽古堂と称し，後の藩校日新館に発展していった。

８代将軍吉宗が展開した享保改革（1716～45 年）では，積極的に教育施策を推進したことで，諸藩もその影響を受けて教育制度を整えた。また，諸藩の財政は次第に悪化したことから,封建社会の立て直しのために抜本的な改革が求められる様になった。そのため，多くの藩が藩政改革のための有能な人材を育成する目的で藩校を設立するようになった。各地では優秀な学者の招聘が盛んに行われ，藩校はほぼ全藩に設立さ

れていった。高須藩松平家の日新堂（享保年間（1716～36 年創設），萩藩毛利家の明倫館（享保４(1719)年創設），岡藩中川家の輔仁堂（享保 11(1726)年創設），丸亀藩京極家の正明館（寛政６(1794)年創設），仙台藩伊達家の学問所（後の養賢堂：元文元(1736)年創設），大洲藩加藤家の止善書院明倫堂（延享４(1747)年創設），鳥取藩池田家の尚徳館（宝暦７（1757）年創設）等，各地で藩校が設立された。

18 世紀後半の教育改革は，現実課題の克服を目指す政治実践や政治改革の手段として捉えられていったことに特徴があり，19 世紀以降，儒学だけでなく実学，医学，洋学など教育内容が多様化していく要因となった。各藩において政治改革の重要施策として藩校の創建や拡充が行われ，多様な実学・洋学学習や武芸修練を行う総合大学へと発展していった。18 世紀後半から 19 世紀にかけて設立された代表的な藩校としては，尾張藩徳川家の明倫堂（天明３(1783)年創設)，彦根藩井伊家の稽古館(寛政 11(1799)年創設。のち弘道館と改称)，庄内藩酒井家の致道館(文化２(1805)年創設)，佐倉藩堀田家の成徳書院(天保７(1836)年創設)，水戸藩徳川家の弘道館（天保 12(1841)年創設），松代藩真田家の文武学校(安政２(1855)年創設)，福井藩松平家の明道館（安政２(1855)年創設)，福山藩阿部家の誠之館(安政２(1855)年創設)，高遠藩内藤家の進徳館(万延元(1860)年創設)，盛岡藩南部家の作人舘（慶応元(1865)年創設）等が挙げられる。

写真２-53　庄内藩致道館

最終的に設立された藩校数は，改称・分離・合併等を含めると 750 校に上り（大石学，工藤航平「国内藩校の比較調査・研究－藩校研究の現状と集成－」『近世日本の学問・教育と水戸藩Ⅱ』水戸市，2011)，藩校設立の全国的な隆盛を窺うことができる。

また，藩士たちの中には参勤交代で江戸に長期詰める者や，代々江戸詰めの者もいることから，水戸藩（江戸弘道館）のように江戸藩邸に藩校を設ける藩も存在した。

藩校で学ぶことができる学問は藩によって異なるが，幕府に倣って朱子学を正学とした諸藩が多かったため，積極的に朱子学が学ばれた。藩の規模により藩校の規模も異なるものの,大藩になると聖廟を整え,藩士や領民が学ぶための講堂が設けられた。さらに，藩主が藩校の様子を見学するための御部屋や御殿が設けられた。

幕末になると，儒学を基盤にしつつ，洋学を始めとする様々な学問を学ぶことができる藩校が増加した。特に水戸藩の弘道館は，国内最大規模の敷地面積を持ち，施設・組織・制度が体系化され，洋学学習などの実学や武芸修練を採り入れた総合大学のような機能を持ち，他藩の藩校運営にも影響を与えた。

ウ　郷校（郷学）

文書社会であった近世では，行政をとりしきる武士はもちろん，町や村を運営する領民にも高いリテラシーが求められた。そのため，全国の領主は武士や領民のための

郷校（郷学）を設営した。また，民間でも郷校（郷学）を創設する動きが高まった。

郷校（郷学）は主に①領主が家臣のために設けた学校，②領主が領民のために設けた学校，③民間有志で設けた学校，などに分類できる。

①は大名一門や重臣などが自らの家臣（藩からみると陪臣にあたる）を対象とした学校で，藩校に準ずる存在といえる。有備館は，仙台藩伊達家一門である岩出山伊達家２代伊達宗敏の隠居所として整備し，正徳５（1715）年に４代村泰が庭園を整備したと伝わる。その後，嘉永３（1850）年から５年頃の 10 代邦直の時代に，家中子弟の郷校（郷学）として整備された。

②の代表は岡山藩主池田光政が創設した閑谷学校である。寛文８(1668)年，岡山藩は領内郡中に 123 か所の手習所を設置した。この手習所を集約するかたちで設置され，庶民の公的教育機関として発展を遂げていったのが寛文10(1670)年に創設された閑谷学校である。閑谷学校は，２世紀半にわたり教育活動を展開し，庶民教育を中心としながら，武士や他地域の子弟も受け入れた先進性や，地域の人々に支えられ，教育制度の変化にあわせて存続した継続性等，優れた特徴があった。

近世後期になると，藩政改革の一つとして教育をあげる藩もあり，支配者である武士と同じく，領民の教化活動にも一層力を入れた。水戸藩第９代藩主徳川斉昭は，藩士だけでなく領民にも教育を行き届かせることを目指し，教育を通して人材の育成を目指した。そのため，領民が学べる場として領内に４つの郷校（敬業館，益習館，興芸館，時雍館）を創設した。

③の民間が郷校（郷学）を開く事例として，享保２(1717)年，摂津国平野郷の有力者である土橋友直らによって含翠堂が創設された。地元の有力者が援助を続け，専任の教師を配置した。

民間と幕府や藩が協力して成立した事例もある。幕府は享保８(1723)年，江戸深川に菅野兼山が開いた会輔堂の運営を支援したほか，享保 11(1726)年には，大坂の５人の豪商が設立した懐徳堂を官許の学問所として保護するなど，郷校（郷学）への援助を行った。これら郷校（郷学）は主に町人を対象としたもので，実学を重視したものであった。伊勢崎藩の郷校（郷学）は官民協営ともいえるもので，藩校の教官を派遣して定例講釈を行わせている。幕府領であった美作久世では代官の早川正紀と地元の大庄屋たちが協力して創設した典学館がある。早川は備中笠岡の代官も兼任しており，笠岡でも郷校敬業館の創設に携わっている。私塾が藩の運営する郷校(郷学)へ変遷する事例もある。儒学者菅茶山は，備後神辺に私塾黄葉夕陽村舎を設けたが，のちに福山藩の郷校(郷学)となり廉塾と称した。

写真２-54　廉塾

郷校（郷学）は設置主体がさまざまであり，規模もまちまちであるが，領主が設置した郷校（郷学）の方が規模は大きかったといえる。特に閑谷学校は，広間型講堂や

聖廟を備え大藩の藩校に並ぶ規模を誇る，近世日本を代表する郷校（郷学）であった。

エ　私塾・手習塾（寺子屋）

近世には町人や下級武士出身の学者も多く誕生した。朱子学派（木下順庵，山崎闇斎ら），陽明学派（中江藤樹，熊沢蕃山ら），さらに原始儒教に回帰する試みをした古学派（伊藤仁斎，荻生徂徠ら）が誕生するなど活況を呈した。彼らの多くは私塾を設置し，身分にかかわらず様々な層を受け入れながら，研究と教育の普及に当たった。

近世初期の代表的な私塾としては，寛永16(1639)年に創設された中江藤樹の藤樹書院，寛文２(1662)年に創設された伊藤仁斎の古義堂等がある。彼らによる研究の過程で，日本古来の神仏信仰や民俗儀礼などと習合し，儒学は日本独自の発展を遂げた。この動きは，後に18世紀に国学者として活躍する本居宣長の鈴屋など，国学塾の発達にもつながっていった。

写真２-55　古義堂

手習塾（寺子屋）では，村の有力者や武士の浪人が師匠となって，『庭訓往来』や教訓物の『実語教』などをテキストに用い，また実用的な数の計算を行う算盤を教えるうちに，識字率や教育熱がさらに高まり，これに応えてより多くの書物が出版された。18 世紀後半から 19 世紀にかけての時期には大量の書籍が市場に出て，より多くの人々が読み学ぶようになった。それとともに身分の枠を越えた学びが広がり，儒学のほかに国学・心学・洋学などを教える私塾が生まれてきた。

また，幕府や藩による政治改革と藩校の広がりは教育の裾野を広げる役割を果たし，18 世紀後半以降，私塾が各地に開設され，教育の隆盛をもたらした。『日本教育史資料』（明治 23(1890)年）には 1,458 校の私塾が記録されているが，実際はその数倍に上るものと考えられる。師を慕って全国各地から集まった塾生は，身分の差なく学び，議論を交わす機会に恵まれた。

19 世紀に創設された著名な私塾としては，文化 14(1817)年に廣瀬淡窓がはじめた豊後日田の咸宜園や，文政８(1825)年に藤沢東畝がはじめた大坂の泊園書院，弘化４（1847）年に池田草庵が地元但馬ではじめた青谿書院等が挙げられ，多くの遊学の徒がその門をくぐった。私塾における学習を通じて，人々は，漢文を自在に読み書きできる語学力や，事に当たって正しく的確に判断できる判断力，正しく行動できる倫理性の陶冶等の教養を学習することができた。こうした教養は，実学・洋学の学習の前提となるものであった。さらに，幕末には，佐久間象山（象山塾），勝海舟（海軍塾），吉田松陰（松下村塾）といった中央での政局に深く関わる人物が塾を開き，幕末の動乱期や明治以降に活躍する人材を育てた。

このような中で，特に咸宜園は，全国から身分や地域を越えて多くの人々が集まり，

最大規模の私塾となった。入門時から徹底した実力主義を貫くとともに，名称は「咸宜し（ことごとくよろし）」という門下生一人ひとりの個性を最大限に尊重する趣旨から生まれた近世最大規模の私塾であった。例えば長州の大村益次郎が，咸宜園で高度な教養を学んだ後に，大坂の緒方洪庵（こうあん）が主宰する適塾（てきじゅく）で学ぶなど，日本の実学・洋学受容の一翼を担っていた。19 世紀の私塾は学問の多様化の中心的存在であり，咸宜園はその代表的な存在といえ，咸宜園を起点に学びが広がっていく様子を知ることができる。

洋学塾として，文政 7（1824）年にシーボルトが創設した鳴滝塾，天保 9（1838）年に緒方洪庵が創設した適塾などが著名であり，限られた国と決められた場所でしか交易を行なわなかった近世日本では，海外の優れた知識・技術を学ぶ場となった。

私塾・手習塾（寺子屋）は個人で運営したため，個人宅をそのまま学びの場とすることも多いが，咸宜園のように門下生の数が多く，また遠方から入学する者がいる規模の大きな私塾となると，校舎や門下生の寮舎を整備した。

オ　その他（近世の学校を支えた資産）

このほか，学校ではないものの，学校を支える資産も教育遺産ということができる。

著名な学校では多くの門下生がいたことから，寮では足りず，周辺で下宿をする場合もあった。特に，咸宜園は全国から多くの入塾生がいたため，隣接する豆田町には下宿者を受け入れる家が複数存在した。豆田町は学問や文化活動が盛んであり，多くの学生が行きかう学園都市としての機能を有した。また，咸宜園で学んだ有村左内が，母の琴虹が豆田町で開いていた手習塾（寺子屋）三遷堂を引き継いで教え子を育てた。咸宜園を起点として学びが広がっていく様子を知ることができる。

水戸藩の藩校弘道館を創設するにあたり，水戸藩第 9 代藩主徳川斉昭は，「一張一弛」の理念により，勉学に励む弘道館だけでなく，修養する場として偕楽園を開園した。弘道館と偕楽園は合わせて一つの教育資産ということができる。

(6)　教育遺産群の成果

教育遺産群では，教養を深めることを目的として多くの人々が学び，社会で活躍する多くの優秀な指導者や人材を育てた。多くの人々のリテラシーが向上することで文書を正しく理解し，支配機構や自治組織が円滑に運営されることで経済や産業が発展し，近世日本社会の一層の安定化へ繋がった。こうして，人々が一層学習意欲を高めて，それにともなって学習環境がさらに整備され，さらに社会・文化が発展することになった。

また，地域に関係なく人々が学びを求めて移動することで，文化人や学者どうしの交流も深まった。足利学校は，研究センターとしての役割を担い，全国から多くの文化人や学者が集まった。閑谷学校や弘道館の名声を知り，多くの人々が閑谷や水戸に訪れた。咸宜園では学んだ門下生が地元に戻り，地元の人々に自らが学んだことを教えるようになった。

さらに，人々の交流は学問の知識が広まっただけにとどまらず，例えば閑谷学校や弘道館は他の学校の運営モデルとなり，咸宜園独自の教育システムである月旦評は，他の私塾や藩校にも導入されていった。

このように様々な学問と知識が全国に伝播して，高度な知的ネットワークが構築されることにより，人々の学問と知識は深まり，さらなる学びを求めるようになった。

(7) 日本の近代化の前提としての教育遺産群

近世日本は，諸外国との交流を制限しながら国家を維持してきたが，19 世紀半ばに欧米列強による圧力を受けて開国の道を歩んだ。しかし，欧米列強の植民地にならずに，非西欧社会で初の近代化を達成した日本に対し，いかなる歴史的条件がそうさせたのかが，海外からもしばしば注目されている。

なかでも，近世日本の教育の発達が，欧米列強の文化を速やかに吸収し，近代国家の体制をいち早く作った原動力となったという視点は，ハーバート・パッシン，ロナルド・ドーア，リチャード・ルビンジャー等，海外の研究者からも指摘されている。

近世日本には，官立（官営）学校から私塾・手習塾（寺子屋）まで様々な学校に通うことで，高い専門性と教養を身につけた人材が多数蓄積された。制限はあっても，洋書が漢語に翻訳された漢訳洋書となって招来され，欧米の科学や文化を学ぶことができた。

また，近世の教育は近代の教育制度にも影響を与えた。明治政府は明治 5 (1872) 年に学制を発布し，国民皆教育の実現を目指した。近代の教育制度は欧米列強の制度を幅広く取り入れたものであるが，政府は，近世の学校を公的教育機関に組み入れ，近代教育の学校に充てた。岡山藩学校，閑谷学校，萩藩明倫館，水戸藩弘道館，松代藩文武学校等，旧藩校敷地内に学校施設が多いのはこのためである。教師の多くは私塾や藩校等で学び，高度な内容の教材を理解し，生徒たちへ指導できる人材が選ばれた。

政府は高等教育機関として大学と専門学校の設置を認め，教育の拡充を図った。当初，国立大学の教師はお雇い外国人によって占められたが，私学の専門学校の創立者や教師は藩校の出身者によって占められていた。

当時の国家財政や地方財政の脆弱さに加え，学制導入により国民に負担を求めたため，学制反対一揆が起きるなど，多くの課題が生じたが，近世の教育に学んだ人々と近世の学校の存在が，近代学制，さらには日本の近代化への急速な切り替えを可能にした。

(8) 来日した外国人の評価

近世期，多くの外国人が来訪し，当時の日本の教育の印象を紀行文等に記している（外国人の記した個別の内容は P62 **表 2-7** を参照）。

来日した外国人の多くは，日本人の礼儀正しさを好意的に評価しているが，これは，基礎教養を身につけ，礼節と規範を重視して，それが社会で共有されるという，近世日本の教育の成果と考えられる。また，庶民の大人から子ども，女性に至るまで，十分な教育水準に達している点にも多くの外国人が驚き，武士や庶民の違いを超えて，自由で開放的な教育が浸透していたことを示す物証の一つとして考えられる。

当時，来日した外国人と日本人との接触は限られていたと考えられ，紀行文等の中には誇張や誤解も見られるが，同時代の西欧社会のリベラル・アーツを学んだ外国人の観察眼は，西欧の教育との差違と近世日本の教育の特徴を少なからず伝えている。

表 2-7 来日した外国人の評価例

①フランシスコ・ザビエル（1506-1552）	スペイン人イエズス会宣教師 天文 18(1549)年に来日
「都の大学の外に，尚（なお），有名な大学が５つあって，その中の４つは，都からほど近い所にあるといふ。それは，高野，根来寺，比叡山，近江である。どの大学も，凡そ 3,500 人以上の学生を擁（よう）してゐるといふ。しかし日本に於て，最も有名で，最も大きいのは，坂東であって，都を去ること，最も遠く，学生の数も遙かに多いといふ」	
河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書翰』，東洋文庫，1994 年	

②ルイス・フロイス（1532-1597）	ポルトガル人イエズス会宣教師 永禄６(1563)年に来日
「われらにおいては，女性が文字を書く心得はあまり普及していない。日本の貴婦人においては，もしその心得がなければその格が下がるものとされる」 「われらにおいては，通常，鞭で打って息子を懲らしめる。日本では，それはごく稀なことで，ただ〔…〕によって咎めるだけである」 「われらにおいては，俗人の教師について読み書きを学ぶ。日本では，すべての子供が仏僧の寺で学習する」 「われらの子供は，まず初めに読むことを習い，次いで書くことを習う。日本の子供は，まず書くことから始め，その後に読むことを学ぶ」 「ヨーロッパの子供は，青年になっても，口上ひとつ伝えることができない。日本の子供は，10 歳でも，それを伝える判断力と賢明さにおいて 50 歳にも見える」	
松田毅一,E.ヨリッセン著『フロイスの日本覚書』中央公論社，1983 年	

③アレシャンドゥロ・ヴァリニャーノ（1539-1606）	イタリア人イエズス会巡察使 天正７(1579)年に来日
「かくて日本人の間には，よく一致と平穏が保たれる。子供の間においてさえ，聞き苦しい言葉は口に出されないし，我等のもとで見られるように，平手や拳で殴り合って争うということはない。きわめて儀礼的な言葉をもって話し合い，子供とは思えない重厚な，大人のような理性と冷静さと落着いた態度が保たれ，相互に敬意を失うことがない。これはほとんど信じられないほど極端である。服装，食事，その他の仕事のすべてにおいてきわめて清潔であり，美しく調和が保たれており，ことごとくの日本人がまるで同の学校で教育を受けたかのように見受けられる」	
松田毅一他訳『日本巡察記』東洋文庫，平凡社，1973 年	

④ロレンソ・メシア（？-？）	ポルトガル人宣教師 16 世紀後半に来日
「我等の文字は二ヶ月で覚える。彼等は甚だよき記憶を有し，少年は皆いかに複雑な使の口上も，我等に言ったとほり正確に伝へ，大人達はキリシタンとなって一年に達せぬ者も，生れた時よりキリシタンであったものの如くわが教を説く」	
松田毅一監訳『16・7 世紀イエズス会日本報告集』，同朋舎出版，1987-1998 年	

⑤フランソア・カロン（1600-1673）	オランダ商館長 元和５(1619)年に来日
「彼らの言語・写字・計算の方法，子孫に歴史を公開す…彼らは特に準備せられたペン（筆）を以て書く。彼らの命令は大概手紙によるが，これは迅速に到着し，遅延しないからである。多くの事実を数行に書くことは一つの技術で，何人もこれをよくするのではなく，特に学びかつ修練する要がある。彼らの請求書・書類・手紙・殊に高位長上（こういちょうじょう）に宛てた文が，短文で内容に富んでいるのは驚くべきである。伊太利流の簿記法を知らないが，勘定は正確で，売買を記帳し，一切が整然として明白である。彼らの計算は細い棒の上に円い小玉を刺した板（算盤）の上で行なわれる。加減乗除比例まで整数分数とも出来，そうして和蘭におけるよりも，また速算家でない尋常の和蘭人が計算するよりも，一層迅速正確である」	
幸田成友訳著『日本大王国志』東洋文庫，平凡社，1967 年	

⑥ウーロフ・エーリックソン・ヴィルマン（1623-1673）	スウェーデン人 慶安４(1651)年に来日
「日本人は，上司に差し出す陳情書をきわめて短い，それでいて完全な文を書くが，実に驚くべきことである」	
尾崎義訳，岩生成一校訂『日本滞在記』新異国叢書，雄松堂書店，1970 年	

⑦エンゲルベルト・ケンペル(1651-1716)	オランダ東インド会社勤務ドイツ人医師 元禄３(1690)年に来日
「この城《大坂城》には将軍の家宝と毎年西方諸国からの年貢を保管し，また西の諸大名の反乱を防ぐために，強力な守備兵を置き，将軍に最も忠誠を誓っている寵臣のうちから２人の大名にその指揮を命じ，３年ごとに交代させた。しかし，その際注目すべきことは，非番の者が，任務を果して江戸から到着すると，もう一人の者は彼とは言葉も交わさず直ちに出発し，重要な報告事項は文書にして城内の役所に残しておかなければならないということである」	
斎藤信訳『江戸参府旅行日記』東洋文庫，平凡社，1977 年	

⑧ヴァシリー・ミハイロヴィッチ・ゴローニン（1776-1831）	ロシア海軍少佐 文化８(1811)年に来日
「日本の国民教育については，全体として一国民を他国民と比較すれば，日本人は天下を通じて最も教育の進んだ国民である。日本には読み書き出来ない人間や，祖国の法律を知らない人間は一人もゐない」「だから国民全体を採るならば，日本人はヨーロッパの下層階級よりも物事に関しすぐれた理解をもってゐるのである」	
井上満訳『日本幽囚記』岩波文庫，岩波書店，1946 年	

⑨ファン・オーフルメール・フィッセル（1800-1848）	オランダ商館員 文政３(1820)年に来日
町の政治行政は，町年寄とも呼ばれている役人の評議会に委任されている。そして，それらのうちの各人が順番制で一年間，議長として統治に当る。彼らを助けるものは一人の代官と乙名（おとな）たち，すなわち町役人たちである…各人は自らの職務に関して，す	

べての出来事と処置とを詳細に記録し，またそれについての抄録を奉行所に提出する義務がある…彼らはあらゆる要求・請願をすべて前例に従って検討し，その根拠を与えてくれる古い記録に応じてそれを拒否し，あるいは承認するのが慣例となっているので，主人が，その秘書官の進言にすべてをまかせてしまうことができるようにするためである」

「日本人は，勉学に熱心であって疲れを知らない。彼らがオランダ人や中国人のもとで修業するために，日本国内の他の地方から長崎に留学することもまれなことではない。なかでも近年，これまで以上に数多く長崎に姿を見せ，またその才能と進歩のいちじるしい証拠を示したものは，多くの医師たちである」

「私には日本人ほど好んでペンや筆を振う国民があるとは信じられない。彼らはあらゆることを文書にして取扱う。また一般的にきわめて広い範囲にわたって手紙のやりとりを続けているので，婦人ばかりか男子も，このために時間の大半を費やしている有様である」

庄司三男・沼田次郎訳注『日本風俗備考１』東洋文庫，平凡社，1978 年

⑩ラナルド・マクドナルド（1824-1894）	アメリカ人 弘化５(1848)年に来日

「日本人のすべての人ー最上層から最下層まであらゆる階級の男，女，子供ーは，紙と筆と墨を携帯しているか，肌身離さずもっている。すべての人が読み書きの教育をうけている。また，下級階級の人びとさえも書く習慣があり，手紙による意思伝達は，わが国におけるよりも広く行われている」

村上直次郎編・富田虎男訳訂，『マクドナルド「日本回想記」ーインディアンの見た幕末の日本ー』刀水書房，1981 年

⑪マシュー・ペリー（1794-1858）	アメリカ海軍東インド艦隊司令長官 嘉永６(1853)年に来日

「他の国民の物質的進歩の成果を学ぶ彼等の好奇心，それを自らの使用にあてる敏速さによって，これ等人民を他国民との交通から孤立せしめている政府の排外政策の程度が少ないならば，彼等は間もなく最も恵まれたる国々の水準にまで達するだろう。日本人が一度文明世界の過去及び現在の技能を所有したならば，強力な競争者として，将来の機械工業の成功を目指す競争に加わるだろう。（中略）下田でも函館でも印刷所を見なかったが，書物は店頭で見受けられた。それ等の書物は一般的に初歩的性質の安価なものか通俗的の物語本又は小説本で，明らかに大いに需要されるものであった。人民が一般に読み方を教えられていて，見聞を得ることに熱心だからである。教育は同帝国いたるところに普及しており，また日本の婦人は中国の婦人とは異なって男と同じく知識が進歩しているし，女性独特の芸事にも熟達しているばかりでなく，日本固有の文字によく通じていることもしばしばである。アメリカ人の接触した日本の上流階級は，自国のことをよく知っていたばかりでなく，他の国々の地理，物質的進歩および当代の歴史についても何事かを知っていた」

『ペルリ提督日本遠征記』全４巻，岩波文庫，1952-55 年

⑫アレクサンダー・フォン・ジーボルト（1846-1911）	ドイツ人 安政５(1858)年に来日

「日本語の授業のほかに，私は正規の漢字を習った。当時，日本の子供に文字を教えた方法をそのまま私にもやらせようとした。私は最初にいわゆる部首を覚えねばならなかった。日本語の文字は約三万あるといわれているが，すべての文字はこの部首をもとにして構成されているからである。その教授法は極めて単純である。すなわち太い筆と墨を使い，綴った紙に何回も何回も同じ文字を上に重ねて書くので，終いには黒いインクの大きなシミのようにしか見えなくなる。更にその上に書き続けると，ついには墨は次第に吸取り紙にしみ込んでゆくように紙に浸み込み，習字帳は黒い固まりになってしまう。これを後で日に乾かし，そして，何度も書く，あるいはもっと正確にいえば，塗りつぶすのである。およそ百回も同じ字を書くと，ついに生徒ははっきりと覚えてしまい，清書してもよいことになる。先生は清書を朱墨でなおす。石盤を全然使わない。この単純な書き方の教授では，たくさんの線や形からできている文字を覚えさせるために，強いて機械的な方法を生徒に課しているのである。日本人がある文字の書き方を忘れてしまった時，彼がどんな風にするかを観察するのは，特筆に値する。日本人は長いこと考え込まず，人指し指を無雑作になんの上に書くというわけでもなく動かしているが，普通は数回やっているうちに，複雑な字画の文字を思い出すのである…テキストは普通古典の書物であるが，クラス全体が同時に先生といっしょに大きな声を出して読む。もっと正確にいえば，合唱するのである…長い文章を講義する時には，最初はただ読み方だけを暗誦し，意味は問題にしない。後日上級に進んでから，やっと文字の意義や本文の意味を説明するのである」

斎藤信訳『ジーボルト最後の日本旅行』東洋文庫，平凡社，1981 年

⑬ローレンス・オリファント（1829-1888）	イギリス公使館書記官 安政５(1858)年に来日

「江戸にヨーロッパの諸国語の教授が存在するということは疑わしいにしても，教育の発達状態，及び全国にわたってそれが広まっていることは疑う余地はない…面白い例が，今後公式の信書に用うべき国語について行なわれた討議の中にあった。一人の委員が，『左様，貴下がたは，英語を公用語とした方がよろしい。貴下がたが，日本語で公文書を書くことができるようになるまでにはどれほど長い期間がかかるかわからない。ところが私たちに五年の歳月を与えるならば，私たちは貴下がたと英語で文通する能力を十分身につけるだろう』といったのである…（日本人は）熱意と好奇心とに満たされる。彼は調べてみて，手のとどくかぎりのことは何でも質問を発してその答を丹念に書き留める」

「この記事からみると，日本には国民教育についてわが国よりもっと広く普及している制度があるようである。そして，他の点についてそうでないとしても，とにかくもこの点に関するかぎり，彼らがわれわれよりも進歩していることは明らかであると思われる…ゴローニンがこの事実を実証している。彼はこう述べている。『日本人はきわめて読書を好む。ふつうの兵士でさえ，勤務に当っていつも書物を携えて従事している…彼らはまた，まるで郵便制の楽しみにふけっているかのように，たがいに短い手紙を書くことが好きである』」

「日本人はすべて小さな携帯用のインクスタンド［矢立のこと］をひもで胸に下

げている。それはふつうきれいに漆で塗られ，中にペン，というよりも筆を一本収め，またインクを漏れないように入れた小さな部分がある。懐にはたくさんの紙がある。一枚一枚になっていることもあるし，閉じてノート・ブックの形になっていることもある。われわれの金属の付いたノート・ブックは，いつも羨望と好奇の的になっていたし，インド・ゴムのバンドの効用もしかるべく認められていた」

岡田章雄訳『エルギン卿遣日使節録』新異国叢書９，雄松堂書店，1968 年

⑭ラザフォード・オールコック（1809-1897）	イギリス初代駐日公使 安政６(1859)年に来日

「日本では教育はおそらくヨーロッパの大半の国々が自慢できる以上に，よくゆきわたっている」

山口光朔訳『大君の都』岩波文庫，1962 年

⑮アルベルト・ベルク（1825-1884）	プロイセン人画家 万延元(1860)年に来日

「絵による表現への好みは一般的であって，ほとんどすべての日本人が絵を描くらしい。字を書くにも手と目の修練がいるが，単に書くだけでなく，美しく書くことが要求されるので，子供のときから時間をかけて入念にやるのである…どこの本屋へ行っても，絵図入りの書物は無数に見出すことができるし，また何百という絵だけの本もあるのである」

「書籍が安価なことと，日本人はどんな身分の者でも読書欲のあることはすでに序章で述べておいた。番所にいる兵士でさえ本を読んでいるし，子供や妻君や娘たちも熱心に読書に耽っているのが見られる。彼らの長編・短編小説の文献は非常に広範なものに違いないし，中には確かにヨーロッパの言葉に翻訳する価値のある魅力的なものも含まれているであろう。歴史の書物も，百科全書も豊富である。自然，学問，芸術，技術についての研究書ないし手引書が無数にあることは，この民族の活発な知識欲を証明するものである」

「読み書き，国史，道徳哲学等についての青少年教育は，非常に熱心に行なわれている。いろいろな段階の教育施設もある…書道は低い身分の間でも一般的によく広まっている。暇なときの読書は，あらゆる階級の日本人が第一にすることである。本屋には，日本・シナの書のみならず，地理・民俗・天文，その他自然科学の各部門，医学・戦術・兵書等々のヨーロッパの本の翻訳が見られる。本屋は至る所の通りにあり，本は信じられないくらい安く，それでいかに多くの本が読まれているかもわかるのである」

中井晶夫訳『オイレンブルク日本遠征記』上，新異国叢書，雄松堂書店，1969 年

⑯エメ・アンベール（1819-1900）	スイス全権大使 文久３(1863)年に来日
「日本人は，子供らが教育によって受ける利益を無視しようと誰も思いはしない。ただ学校教育の基準も知らず，頑固な父親が当然，筋を通してよい強制力の程度もわきまえていない。しかも成年に達した男女とも，読み書き，数の勘定ができる。日本の教育制度のすべてを軽蔑してはならぬ，と私はあえてここでいいたいのである。」	
高橋邦太郎訳『アンベール幕末日本図絵』雄松堂書店，1969 年	

⑰ハインリッヒ・シュリーマン(1822-1890)	ドイツ人考古学者 慶応元(1865)年に来日
「日本の教育は，ヨーロッパの最も文明化された国民と同じくらいよく普及している。それはアジアの他のすべての民族が，中国人でさえも，まったくの無学のうちに彼らの妻たちを放置しているのとは対照的である。だから日本には，少なくとも日本文字と中国文字で構成されている自国語を読み書きできない男女はいない」	
藤川徹・伊藤尚武訳『日本中国旅行記』雄松堂書店，1982 年	

２．２．２　各構成資産の歴史

(1)　足利学校

足利学校の創始は９世紀から 13 世紀などはっきりせず，創始者も①律令制下の国学の流れ，②平安時代の官僚で歌人の小野篁（たかむら）の創立，③足利義兼（よしかね）の創立，④上杉憲実の創立など諸説あるが，いずれも定説とはなっていない。

文献上足利学校の活動が明確になるのは，15 世紀前半に関東管領の上杉憲実と一世庠主快元（しょうしゅかいげん）との協力で足利学校が再興された頃からである。上杉憲実は貴重な書籍を寄進し，学則「学規三条」を定め，教育の方針を定めた。そこでは三註をはじめ，儒学，老荘の学，史記，文選を講じ，仏典などは講じてはならないとされ，あくまでも儒学中心の教育の場とされた。

足利学校は快元を始め五山文学の流れを汲む学問僧が庠主（校長）となり，戦国の世でもアジール的存在として学校の役割を果たした。小田原北条氏を始め戦国武将は足利学校に援助を行い，足利学校も戦国武将に卜筮（ぼくぜい），兵学，医学等を講じるなど，時代に即した学問を行った。

この頃足利学校を卒業した学徒には，北条氏康・氏政親子に講義した九華（きゅうか）や徳川家康のブレーンとなった天海，日本医学中興の祖といわれる曲直瀬道三（まなせどうさん）などが知られる。宣教師フランシスコ・ザビエルは「坂東の大学」として足利学校を日本最大の大学と記している。都の大学が衰退する一方，古代以来の学問を近世へとつなぐ役割を果たした。

近世に入り，徳川将軍家による幕藩体制が整備されると，足利学校も幕藩体制の中に組み込まれていくことになった。幕府から百石の領地を与えられ，庠主は幕府が任命することとなり，寺社奉行の支配下に入った。徳川歴代将軍の位牌が安置され，将軍の命日には法要を行った。

寛文８(1668)年には，幕府の支援により大成殿(孔子堂)が建てられ，あわせてそこに通じる３つの門が建立された。近世の配置は，堀と土塁に囲まれた構内の西側に南面して足利学校を象徴する大成殿があり，その南に杏壇門，学校門，入徳門がある。東側には主要建造物の方丈・庫裡・書院があった。構内南東隅の衆寮は４つの小部屋からなり学徒の学習や生活の場であった。宝暦４(1754) 年に落雷から出火し，方丈・庫裡・木小屋・学寮・土蔵などが焼失した。大成殿や文庫，３つの門，稲荷社は類焼を免れた。翌５(1755)年に幕府から 500 両が下され，修復がなされた。この時幕府に提出した文書の写しは焼失前の足利学校の様子を明確に記しており，平成２(1990)年に方丈・庫裡・書院などを復元する際に活用された。

近世の足利学校は学問所としての活動は中世に比べて低調であり，学生の数は減ったものの，講義は行われた。また，上杉憲実の寄進以来膨大に蓄積された書籍を求め，多くの文化人や学者が足利学校を訪れた。

足利学校は明治初期に廃校となり，東側の敷地は小学校となって，方丈・庫裡・書院は取り壊された。一方で地元の有志が足利学校の保存を働きかけ，明治13(1880)年に国も足利学校の遺跡を再整備した。文化人や学者が訪れた文庫は，孔子廟（大成殿と杏壇門・土塀）の東側，ついで南東部にあったが，明治 15(1882)年頃に孔子廟の南

西隅に新築された。

昭和 57(1982)年に史跡内の足利市立東小学校が移転し，史跡の発掘調査や，寛政年間の絵図面である「境内惣坪並諸建立物絵図」などをもとに，平成２(1990)年に東半分を近世中期の配置に復元した。

(2) 閑谷学校

閑谷学校は，寛文 10（1670）年に設立された世界で最古の庶民のための公立学校である。岡山藩初代藩主池田光政が，村や地域の運営にあたる指導者たちを養成する目的で設置した。

光政は岡山藩の統治をすすめるうえ，藩士と領民両方の教化を必要と考え，寛文８（1668)年，岡山藩は「百姓小年の者学文（問）すべき所」として，領内郡中に 123 か所の手習所を設置した。のちに財政的な事情もあり，手習所は集約されていったが，集約するなかで庶民の公的教育機関として発展を遂げていったのが寛文10(1670)年に郷校（郷学）として創設された閑谷学校である。光政は先祖の墓所を整備するために領内を巡視した際に,「山水静閑」のこの地に学校を作ることを決意したとされている。

光政は岡山藩士津田永忠に整備を命じ，永忠は閑谷に居を構えて整備に専念した。学房が寛文 12(1672)年に，講堂が延宝元(1673)年に，聖廟が延宝２(1674)年に建造され，光政の死後には学校の恒久化を目指して校内建造物の改築を行い，現在の閑谷学校の規模は 17 世紀末に整った。

岡山藩では藩主家の池田家が岡山を離れても閑谷学校が永続することを願い，学校の運営を支える財政基盤として学田・学林を設定した。領内から入植者を募り，閑谷新田村が誕生した。

教育内容は基礎的な手習い・算用・素読から儒学の講釈まで幅広く，階層を超えた人々の共通の教養として広める役割を担った。庶民教育を中心としながら，武士や他地域の子弟も受け入れ，学校の教育や運営に庶民出身者を登用するなど，開かれた学校であった。例えば，幕臣として鳥羽伏見の戦いで活躍した大鳥圭介は藩外からの入学者であったが，明治維新後は技術官僚として殖産興業政策に貢献している。

また，各地の文化人によって閑谷学校の存在は高く評価され，彼らの交流の場にもなった。他藩がその運営方法を取り入れるため視察に訪れた。

学びの場である講堂は，宗教建築に準じた質の高い空間として設計され，堅牢な石塀で囲まれた全体は学びの理想を示している。単独で立つ講堂の東側には，孔子を祀る聖廟と創設者である池田光政を祀る芳烈祠（現閑谷神社）を配し，特に聖廟は敷地に一段高く立地している。

儀式空間と出火しやすい日常空間（学房群）は火除山によって隔離している。

光政を祀る芳烈祠（現閑谷神社）や，光政の爪や髪を納める御納所がある椿山により，庶民教育の場という廃されやすい立場の学校を守る建造物配置としている。

閑谷学校は，明治４(1871)年岡山藩の廃止によって閉校となるが，明治６(1873) 年には閑谷精舎として再興され，その後も閑谷黌・私立閑谷中学校・岡山県閑谷中学校等と移り変わる。教育制度の大幅な改変後も，脈々とその学びの伝統は受け継がれて

いる。また，閑谷学校は，現在でも完成時の遺構と配置がほぼそのまま残っている。現存する日本最古の学校講堂は，国宝指定を受け，聖廟を含む３件 23 棟と石塀は指定重要文化財に指定されている。

(3) 咸宜園・豆田町

３－１　咸宜園

咸宜園は，文化14(1817)年，儒学者であった廣瀬淡窓が幕府領である豊後国日田の地に創設した漢学を学ぶ私塾である。

淡窓は豆田町の豪商である廣瀬家の出身で，伯父の月化は日田俳壇で活躍し，父の三郎右衛門も学問を嗜む文化人であった。淡窓は伯父や父，そして豆田町にいる多くの文化人から学問を学んだ。淡窓は病弱のため家業を継がず，学問で身を立てていくことを決意する。

文化２(1805)年，豆田町の長福寺学寮で教授を始めた淡窓は，その後転居して私塾「成章舎」を開き，入門者が増えたことで新たに「桂林園」を開いた。開塾にあたり，手嶋（伊予屋）義七が土地を提供し，費用の半分を用意した。さらに文化 14（1817）年，塾を閑静な地に移して，塾生と起居をともにして教育指導に励むため，豆田町から南に 400 mほど離れた堀田村に塾を移し，伯父月化夫妻の居宅である秋風庵に隣接する場所に「咸宜園」を開いた。咸宜園の名は『詩経』の一節である「殷命を受く咸宜（ことごとくよろし），百禄是れ何う（荷う，になう）」に由来するといわれる。

咸宜園の特徴は，年齢や学歴，身分に関わらず，塾生を受け入れる「三奪法」による平等主義や，塾生の毎月の学業成果を評価し序列化した「月旦評」による徹底した実力主義を取り入れるなど独自の教育システムがあげられる。

また，学ぶ前にまず治めることが重要と考えた淡窓は，塾の生活を律する厳しい諸規則を設けて，教育環境を整えた。寮の共同生活の中で全員に職任を分担させて，協力し合うことで塾生の社会性を養うことを目指した。さらに漢詩の詩作奨励による情操教育を重視した。

咸宜園では休日があり，郊外で教育する機会も設けた。春と秋には「春秋山行」を行い，自然や寺社に遊行して，塾生の心身をリフレッシュしたのである。

こうした教育法が広く知られ，多くの塾生が集った。門下生は九州出身者が多いが，四国や本州出身者もおり，なかには東北地方（陸奥国）から入塾する者もいた。明治30(1897)年の閉塾までに 5,000 人を超える門人を輩出し，岡研介（医家）・大村益次郎（兵部大輔）・長三洲（文部大丞）・上野彦馬（写真家）・清浦奎吾（内閣総理大臣）など門人は各分野で活躍したが，出身地に帰った後に教育者となる者も多く，庶民教育の裾野を拡大した。

さらに，咸宜園の教育システムは他の学校にも広がり，安芸国の三亦舎や成美園（ともに広島県）や水哉園（福岡県），泊園書院（大阪府）ほか，藩校でも月旦評を取り入れたところが存在（大村藩校「五教館」）した。このうち三亦舎は，咸宜園の門人末田重邨によって開かれ，さらに成美園は三亦舎の門人佐々木省吾によって開かれるとい

うように，咸宜園を原点とした学びの広がりをみてとることができる。

咸宜園は豆田町と在郷町の隈町を結ぶ街道（別称：豆隈大道）に面していた（西家）が，その後，塾生の増加に伴って，文政７(1824)年には通りを隔てた隠宅がある東側(東家)に敷地を拡げ，塾舎などを増築していった。その過程で，東側の伯父夫婦の隠宅「秋風庵」も敷地内に含まれることになった。

嘉永年間(1848～54)には大小15棟を超える多くの建造物が敷地内に存在していたことが古絵図や発掘調査などで明らかとなっている。東西に長い約200 坪の空間は，街道を隔てた東西の敷地に分かれ，東家側には現存する秋風庵（居宅）や遠思楼（書斎）のほかに講堂や東塾（寮舎），居宅・客間・書斎として利用された招隠洞・梅花塢などが点在していた。

また西家側は，考槃楼(居宅)や講堂，寮舎(西塾，南塾・南楼)などが咸宜園絵図から確認でき，そのほとんどの建造物は東西棟である。東側の空間は塾主家が生活する敷地と塾生の学びの場や生活を行う敷地(キャンパス)が植栽で明確に画されていた。

現在，咸宜園は史跡となり，秋風庵や遠思楼といった建造物が現存するとともに，史跡地がすべて公有化されて，引き続き日田市によって遺構調査が進められている。

３－２　豆田町

豆田町は,慶長６(1601)年に,代官小川光氏が花月川右岸の月隈山に丸山城を築き，同左岸に町人地として丸山町が築かれたことに始まる。

元和２(1616)年に日田藩主石川忠総が入部し，丸山城を永山城と改め，元和４(1618)年には町人地を西側に拡大した。寛永16(1639)年に日田郡の大部分が幕府の直轄地となり，永山城跡に代官所（日田御役所）が設置され，永山町は豆田町と改名された。

その後，日田はしばらく幕府領であったが，天和２(1682)年に松平直矩が播磨国姫路から７万石で入封して日田藩が再興された。しかし，直矩は４年後の貞享３(1686)年に早くも出羽国山形へと転封となり，以降日田は幕府領として明治維新を迎えることとなる。

明和４(1767)年，日田代官は西国筋郡代へと昇格し，日田は九州における幕府支配の政治的中心地となる。また，豆田町の豪商は九州諸大名の御用達となり，特に千原家や廣瀬家，草野家などは掛屋として活躍し，いわゆる日田金によって富を築き，町の発展に貢献した。

近世中期には規格性の強い町割が出来上がり，明和９(＝安永元，1772）年や明治13(1880)年，明治20(1887)年の大火を経て，草葺の町家に代わり，荒壁や漆喰で塗り込めた瓦葺き居蔵造の町家が広まった。

咸宜園の前身である「成章舎」や「桂林園」の頃から豆田町出身の塾生が多く入門し，また他国から入門した塾生は長福寺の学寮や町人宅に寄宿したほか，塾の会計を預かる町人がいるなど，町全体が塾の運営と塾生の生活面の支援を行っていた。経済的に豊かな豆田町では，学問や文化芸術に対しての関心も高く，日田俳壇といわれる俳諧文化が栄え，九州内外の文人墨客が訪れるなど，文化的雰囲気に満ちた土地であった。

このように，豆田町は咸宜園の教育と「共生」した学園都市としての性格を有する町であった。

明治以降も近世以来の町割は大切に残されており，現在も，廣瀬淡窓の生家である廣瀬家（史跡「廣瀬淡窓旧宅及び墓」）や多くの門人を輩出した草野家（重要文化財「草野家住宅」）と旧千原家，開塾初期の経営に貢献した旧手島家のほか，淡窓が初めて塾を開いた長福寺（重要文化財「長福寺本堂」）や寺子屋「三遷堂」などが現存する。このほか，豆田町には塾生の生活を支えた支援者の旧宅跡や淡窓と塾生が過ごした空間など，咸宜園と共に歴史を刻んできた環境が良好に保存されている。これらの歴史的な町並みは，近世初期の町割の構成をよく残す商家町で，平成16(2004)年12月に重要伝統的建造物群保存地区の選定を受けた。

(4) 弘道館・偕楽園

水戸の学問の興隆は，水戸藩第２代藩主徳川光圀の時代に遡る。光圀は，日本の歴史書(大日本史)の編纂事業として，江戸藩邸次いで水戸城二の丸に彰考館を設けた。光圀は優れた学者を全国から招き，さらに長崎にいた中国（明）の学者朱舜水(しゅしゅんすい)を招いた。

水戸彰考館では，学者による儒学の四書五経などの講釈が藩士やその子弟に対して行われ（「史館講釈」），藩校の役割を担った。また，光圀が太田村の西山御殿（現茨城県常陸太田市）に隠棲すると，元禄 10(1697)年から太田村にて水戸彰考館の学者が一般庶民に講釈を行うようになった（「馬場講釈」）。

光圀は勉学・勤務に励むために休息の必要性を理解していた。第３代藩主綱條(つなえだ)が大日本史編纂を急ぐよう彰考館員に督促したときには，休息の必要性を綱條に諭し，勤務と休息のバランスの大切さを示した。これはのちに第９代藩主徳川斉昭が弘道館と偕楽園を創設する際の「一張一弛」の理念に近いものであった。

光圀死後，馬場講釈は廃絶したが，正徳２(1712)年に江戸の朱舜水宅跡にあった祠堂が水戸城下に移築され,その附属講堂にて祠堂守による講釈が行われるようになり，藩士や領民が受講することができた。水戸彰考館でも史館講釈が続けられた。

近世後期になると，水戸城下に多くの家塾が設けられた。水戸を代表する学者藤田幽谷(ゆうこく)は水戸城下の町人出身で，彰考館総裁立原翠軒(たちはらすいけん)の家塾で学び，翠軒の推挙で彰考館に勤めることになり，やがて彰考館総裁となった。領民であっても，有能な人物は藩士にとりたてられることもあった。

19 世紀に入ると，社会のひずみが表面化し，全国で広域にわたる一揆が発生した。一方,欧米列強の船が日本近海に姿を現した(「内憂外患」)。水戸藩でも文政７(1824)年に大津浜（現北茨城市）にイギリス人が上陸する事件が起こった。これはいわゆる「鎖国」のもとで，本州に外国人が上陸した最初の事件であった。

４－１　弘道館

このような時代の文政 12(1829)年，水戸藩第９代藩主に就任したのが徳川斉昭である。斉昭は，藩政改革の一環として新たに学校を建設することとし，教育で人材育成を目指した。まず，領民が学べる場として領内に４つの郷校（敬業館，益習館，興芸館（のち暇修館），時雍館）を設けた。

藩校創設には大きな費用がかかることから重臣たちは否定的であったが，斉昭は押し切り，水戸城の三の丸にあった重臣屋敷を取り払い，広大な土地に藩校を設けることとした。

藩校創設にあたり，斉昭は側用人で弘道館掛だった藤田東湖（とうこ）と建学の精神を述べた「学校御碑文」の草案をまとめ，ついで幕府の儒官佐藤一斎に意見を徴し，さらに彰考館総裁の青山拙斎と会沢正志斎に意見を聞くこととした。この時東湖は碑文を「弘道館記」と称しており，藩校名を弘道館とすることはこの頃には決まっていたようである。弘道館記碑は八卦堂に納められ，藩校の中心部に配置された。完成後，斉昭は弘道館記碑の拓本を作り，藩内外の人々に配ることによって，斉昭の理念を広く理解してもらえるようにした。

弘道館は天保 12(1841)年に仮開館した。仮であったのは，校内に設置する鹿島神社に祀る武甕槌神について，鹿島神宮より分神遷座が済んでおらず，また孔子廟に孔子神位の安置が済んでいなかったためである。両者は日本の神で武の象徴と，中国の儒学の創始者で文の象徴である。弘道館の建学精神である「神儒一致」と「文武一致」には欠かせないものであった。本開館となったのは安政４(1857)年である。

また，江戸小石川の藩邸内には従来武道場しかなかったが，天保 14(1843)年に文武の教場を併設し，江戸弘道館と称した。教育は水戸の弘道館の組織・制度に準拠して行われた。

面積は約 10.5ha に及び，藩校の敷地としては全国最大の規模である。(現在，特別史跡として指定されている面積は 3.4ha)。

施設は，正庁・至善堂・孔子廟・八卦堂・鹿島神社・文館・武館・天文方・医学館・寄宿寮・調練場・矢場・砲術場ほか多数からなり，正庁を中心に右（北）に文館，左（南）に武館を配置して，その配置には建学精神の一つである「文武一致」に即した独特の工夫がこらされている。また，「弘道館記」にも記された実学尊重の立場から，儒学や武道ばかりでなく西洋医学，薬学，天文学など幅広い学問を修めることができる，今日の総合大学のような性格を有していた。

文館には教授頭取・教授・助教・訓導のほか，歌学教師・天文教師・数学教師等，武館には武術教師・同手副の教職がいた。

弘道館に入学するためには入学試験を受ける必要があり，藩士は子弟を８，９歳から城下の家塾に通わせて勉学に励ませていた。水戸藩はこのような家塾に一定の扶持を与え，弘道館の初等教育のような役割を持たせた。弘道館での学びを水戸城下で支える形を整えたといえる。15 歳になると文館への入学試験を受け，合格すると「講習生」という身分となり，弘道館で学ぶことができた。成績優秀者は「居学生」に昇進

し，さらにその中でも優秀者が「舎長」という資格を得た。武館には試験はなかった。

日課については，家臣の家格によって異なるが，30 歳以上及び職事ある者は半減，40 歳以上になると全面的に免除となるものの，希望であれば引き続き受講することができた。また，医学館では日を設定して，町医や領内の郷医を出席させて，医書の講釈や試験を受けさせた。

水戸藩内の政情不安が進むとともに弘道館の活動は低調になる。さらに，明治元（1868）年 10 月 1 日の弘道館の戦いにおいて正庁や正門，至善堂を除いて文館・武館等の建造物が焼失した。明治 5（1872）年，明治政府により学制が発布され，弘道館は藩校としての役割を終えた。同年から 15（1882）年までは，正庁は茨城県庁として使用された。

さらに，昭和 20（1945）年の水戸空襲で八卦堂や孔子廟，鹿島神社が焼失した。しかしながら，現在も旧弘道館跡には正門・正庁・至善堂・孔子廟戟門などの建造物や，弘道館記碑や要石歌碑，種梅記碑といった石碑が残され，当時の区域が良好な形で残されている。また，八卦堂と孔子廟は復元され，鹿島神社の社殿は伊勢神宮の式年遷宮にあわせて内宮の境内別宮「風日祈宮」が特別譲渡され，移築された。

4－2 偕楽園

偕楽園は，日本最大規模の藩校である弘道館の対の施設として，弘道館創設の翌年の天保 13（1842）年に，徳川斉昭自らの設計により千波湖岸の景勝地に造成・開園した。弘道館が文武を学ぶための場であるのに対して，偕楽園は学問や仕事の合間に訪れ，人としての健全育成に必要な心身の修養の場と定められ，約 18ha という広大な敷地を有した。

藩主に就任した斉昭が初めて水戸に入ったのが天保 4（1833）年のことである。開園前の当地は七面堂と呼ばれる祠堂が建つ七面山と呼ばれていた。斉昭は水戸領内を巡視した際に領内で優れた八つの景勝地を水戸八景と定め，七面山から千波湖を望む景観をその一つに選び，翌 5 年に七面山に「仙湖暮雪」の碑を建てた。また同山に梅樹を栽培し，梅干しを製造して軍用に備えることを命じた。

天保 7（1836）年に斉昭によって偕楽園の創設理念を記した「偕楽園記」の草稿ができ，偕楽園の構想を示すと，それを石碑として「偕楽園記碑」が天保 10（1839）年建立された。さらに，天保 12（1841）年に七面堂が他所に移されると庭園の整備が始まり，斉昭自らの設計による好文亭の設営に着手した。翌年の好文亭完成を待って，偕楽園が開園した。

偕楽園の名前の由来は，「偕楽園記」に「衆とその楽しみを偕（とも）にしようとするものである」と記されている。藩士やその子弟，さらには領民の教育を目指した斉昭は，園内に学問を象徴する梅林を設け，訪れる人々を楽しませると同時に，学問に励むよう自らの意志を伝えたのである。また同じく「偕楽園記碑」には「一張一弛」（緊張と休養）の文字が刻まれており，弘道館が修学の場（一張の場）であり，偕楽園は休養の

場（一弛の場）であるという役割を明確にしている。斉昭は家臣で学者の青山拙斎に宛てた書状にも「学校が出来た上の偕楽園でなくてはいけない」と記し，学校（弘道館）あっての偕楽園であり，相互が補完する施設であることを明確に示している。

偕楽園が開園すると，斉昭は同年９月に藩内の老人を身分男女なく招き，養老の典を催した。また，藩内の文化人たちを好文亭に集めて詩会を行っている。

偕楽園は「偕楽園記」に記される，徳川斉昭の陰陽思想（陰と陽といった相反するものの調和によって万物は健全育成する）に基づき，竹林や杉林を「陰」，梅林を「陽」とする庭園構成をもち，人々が修養する場としての工夫がなされている。さらに，園内から望む千波湖と緑地帯の優れた借景美などの特徴から，兼六園（金沢市），岡山後楽園（岡山市）とともに，「三名園」の一つに数えられている。

明治以降，明治６（1873）年，光圀と斉昭を祀る常磐神社の創建のため，偕楽園は梅林の東側約３．６ha（＝約 36,300 ㎡）を割譲し，残りの敷地約 14ha が「常磐公園」という名称となり，公園として市民に一層利用されるようになった（昭和６（1931）年に「偕楽園公園」と改称。ただし文化財の指定名称は現在も「常磐公園」）。

昭和20(1945)年の水戸空襲で好文亭や奥御殿が焼失したが，昭和 33(1958)年に復元された。その後も昭和 44(1969)年の落雷で奥御殿が焼失したが，再度復元された。

現在も，斉昭が作庭した陰陽思想をもとにした園内の配置が良好な形で残されている。